

A-53 各種ゲンゴンの血清ならびに組織コレステロール量におよぼす影響
十文字短大 濃口恵子 大島たか子 林 寛

目的 Staubら (J. Nutrition, 95, 633, 1968) は食餌中のゲンゴンの種類により、血清コレステロール (Ch) 値に差異のあることを報告しているが、この点を確かめるため各種のゲンゴンを動物に与え、成長、血清、肝臓および副腎Ch量、肝臓脂質量などを測定し比較した。

方法 ウイスター系雄シロネズミ (体重約80g) を4群 (1群7匹) にわけ、トウモロコシゲンゴン (C)、バレイショゲンゴン (P)、サツマイモゲンゴン (S)、コムギゲンゴン (W) をおのおの唯一の糖質源とする食餌 (タンパク質はカゼイン18%) を自由に与えて14日間飼育した。血清ChはZak法、組織ChはSperry-Webb法で定量した。肝臓のアルコール抽出、エーテル可溶部を脂質量とした。

結果 成長はW群が最もよく、以下C群、S群、P群の順であり、W群とS群間およびC群とP群間とに有意差 ($P > 0.05$) が認められた。これは食餌効率にもみられる。C群の肝臓と脾臓、P群の副腎重量比は他の群より大きい。血清Ch量はP群が他の群より低い値を示したが ($P > 0.05$)、他の群間には有意差はみられない。肝臓Ch量はP群とC群とが低く、W群とS群とが高い値を示し、S群とP群間、W群とS群間に有意差がみられた。また副腎Ch量はP群が他の群より高く、以下C群、S群、W群の順であり、P群とC群間、S群とW群間に有意差がみられた ($P > 0.05$)。なお肝臓脂質量はW群が最も高い値を示し、以下S群、P群、C群の順であり、各群間に有意差が認められた。